

Lights and Darkness in the Core of Tokyo : *Shinjuku* by Daido Moriyama



copyright 2002, Daido Moriyama

森山大道最新写真集『新宿』2002年7月25日発売／B5変型600頁並製カバー装／本体価格7200円／月曜社

# 月曜

*Supplement Papers of Getsuyosha Limited*  
May 25, 2003

Feature  
*Ethics of the Remnants*  
Alexander García Düttmann reads Giorgio Agamben

月曜 2003年5月25日発行

## 特集：「残りのもの」の倫理

アレクサンダー・ガルシア・デュットマンによる  
ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』の二つの読解

## Contents

### 倫理の両義性

アウシュヴィッツの残りのものをめぐるジョルジョ・アガンベン  
アレクサンダー・ガルシア・デュットマン  
(訳=清水一浩)

### NEVER BEFORE, ALWAYS ALREADY

アガンベンと関係のカテゴリーについてのノート  
アレクサンダー・ガルシア・デュットマン  
(訳=宮崎裕助)

*Special thanks to Prof. Alexander García Düttmann*

※無断複写・無断転載はお断りいたします

好評発売中

アレクサンダー・ガルシア・デュットマン著  
『友愛と敵対——絶対的なものの政治学』  
大竹弘二+清水一浩訳

46判 160頁並製カバー装／本体価格 2200円／2002年6月刊／ISBN4-901477-02-1

「月曜」は月曜社の不定期刊行PR誌です。  
手作り一部ずつ、ごくわずかの書店店頭で配布するていどの数しか作成しておりませんし、  
書籍流通に乗せてはおりません（この体裁からして乗りません）。  
この小冊子はいわばセレンディップだとお考えください。

「残りのもの」の倫理 2003年5月25日発行  
© 2003 Getsuyosha Limited

発行元：有限会社月曜社

182-0006 調布市西つつじヶ丘 4-47-3 電話：0424-81-2551 ファクス：0424-81-2561

発行責任者：小林浩 組版・複写製本：アザレアヒル

emailto: [getsuyosha@yahoo.co.jp](mailto:getsuyosha@yahoo.co.jp) <http://biblia.infoseek.ne.jp/getsuyosha/>

月曜社既刊

- G・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』上村忠男・廣石正和訳、2001年9月刊、2400円
- J・クリフォード『ルーツ』毛利嘉孝ほか訳、2002年3月刊、3800円
- M・ブランショ『問われる知識人』安原伸一朗訳、2002年11月刊、1800円
- R・クノー『オディール』宮川明子訳、2003年3月刊、2200円
- G・C・スピヴァク『ポストコロニアル理性批判』上村忠男+本橋哲也ほか訳、2003年4月刊、5500円

# 倫理の両義性 アウシュヴィッツの残りのものをめぐるジョルジョ・アガンベン\*

アレクサンダー・ガルシア・デュットマン (訳=清水一浩)

歴史的な出来事が哲学的思考に根拠を与え、その思考を正当化するべきであるとするならば、哲学はひとつの困難にぶち当たることになる。というのも、あらゆる普遍的洞察は歴史的な出来事によって強いられていながら、同時にその出来事を超えていることになるからだ。この困難は歴史と哲学を分離することで片づけられたりはしない。現在最も刺激的なイタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベンが、昨秋トリノで公開したその著書『アウシュヴィッツの残りのもの』の中で強調しているのは、無制限な考察がたとえどれほど耐え難いものであっても、倫理が思いあがって、人間の本质をなすものの一部分でも排除するようなことは断じて許されない、ということだ。まさしく歴史的な出来事こそが、人間の能力と無能への洞察を可能にし、人間的なものと非人間的なものや非-人間的なもの [1] との関わりへの洞察を可能にしてくれる。それゆえ少なくとも倫理は、歴史を絶対化すると同時に相対化することの困難から目を逸らすことはできないのである。アガンベンの主張によれば、哲学は日常になってしまった極限状況の視点から世界を考察しなければならない。アウシュヴィッツが、人間的なものに対する表象不可能ではあれ決して偶発的ではない問いかけに与えられた名であるとすれば、哲学者が倫理的な問い一般を立てようと思うのなら、アウシュヴィッツから出発しなければならない。『アウシュヴィッツの残りのもの』は、かつてアドルノが語っていたような、修正された定言命法を我がものにせんとする試みとして読むことができる——すなわち、アウシュヴィッツは反復されないし、それに似たものが起こることもないと考えようとする試みとして。

アガンベンは4年前に、現在すでに仏語と英語に翻訳されている著作『ホモ・サケル』で、主権の本質に根拠づけられるような政治的権力の系譜学に着手していたが、新著『アウシュヴィッツの残りのもの』ではその系譜学をもっと先へ進めている [2]。彼は『ホモ・サケル』で、ミシェル・フーコーによって導入されたひとつの区別に依拠していた。つまり主権的な政治権力は、まずは死刑を宣告したり生かしておいたりする特権によって特徴づけられるが、それはつぎに生政治的な権力に変化して生命維持の戦略を追求し、死を社会の隅へと追いやるのである。いまやこうした主権的な政治権力は次のような事実に見て取られる。すなわち無限の適応力を持った身体、つまり死んでも生きてもいないような身体が生産されるための諸条件をなしているのが、この生政治的な権力だという事実

である。こうした身体の剥き出しの生を、アガンベンは、収容所の中で「回教徒」と呼ばれていた囚人の姿に見出している。非人間性から非-人間的なものに接する限界にまで追いやられながら、「回教徒」は、もはや人間の尊厳を嘆願したり倫理的規範に準拠したりできないまま、人間の姿をしながら人間を超えて生き残る [邦訳『アウシュヴィッツの残りのもの』(本論稿末尾の文献案内を参照)、108頁]。したがって、ある倫理がこの剥き出しの生を盲目のままに無視することのないがゆえに、規範の根拠づけや価値の定立を目的にしていなければ、この倫理が投げかける問いは、自らについて証言しえないがゆえに証言を求めるような生について証言することの可能性に向けられているのである。

ここでこの倫理の両義性が明白になる。すなわちこの倫理は、まさに今日においてこそ剥き出しの生の倫理でなければならないのだが、それにもかかわらず時間的に束縛されない普遍性を要求しなければならないのである。アガンベンによれば、この倫理は一方で、倫理的なものと法律的なものを取り違えて罪と責任の概念を惹き起こすような混同に反対する。証言されえぬものを表現するひとつの証言として、この倫理は自らを正義に即して定位する。正義とは人間の行為のひとつの真理であり、法権利とそれに依存した合法性との領域においてひとつの空所を印づけている。しかしながら、証言されえぬものを証言する逃亡者の視点を取ることで、この剥き出しの生の倫理は他方で、ガス室という歴史的事実の否認に反対しつつ、同時にこの事実の不可避的な称讃にも反対する。この称讃は次のようなテーゼの中にある。すなわち出来事の恐るべき特異性は、それについては何ごとでも語りえないということをもひたすら尊重することにのみ表現されるのだ、というテーゼである [同前、39頁]。

この両義性は否応なく二重化されたひとつの視角の所産であり、ひとつの盲点であって、剥き出しの生の倫理の開始点に基づくあらゆる洞察を貫いている。アガンベンはこの新著で、恥ずかしさにおいて自己を感じるような主体性の思想を展開している。なぜなら恥ずかしさとは主体化と脱主体化の運動であるからだ。この思想は収容所の囚人たちが被ったある経験に基づきながら、同様に、そのような経験がもはや直接的に刻みこまれていない概念的探究にも基づいている。収容所においては誰もが自分でない者のような立場に立たされうるし、それゆえ収容所の住人たちが自らに固有の生を生き固有の死を死ぬことの不可能性を経験するのだとすれば、彼らが感じる恥ずかしさに根拠を与えているのは、彼ら自身が自らの主体性の暴力的な喪失の証人になっているという事実なのである。しかしながら、かくして解消されていく主体の恥ずかしさの感情が剥き出しの生の倫理の領域へと取り上げられる瞬間に、哲学者アガンベンは、この恥ずかしさの感情が示される際にとっている歴史的な形姿からこの感情そ

のものを引き離すことを避けて通りはしない。アガンベンが恥ずかしさで赤面することについての反省から始める。この赤面は「あらゆる主体化において脱主体化をあらわにし、あらゆる脱主体化において主体について証言するところの、その残りのもの (resto)」であることが明らかにされるのである〔同前、150頁〕。

アガンベンがこの新著に選んでいるタイトルは、したがって、二重の意味において解釈することができる。このタイトルがいう残りのものを形づくるのは、証言する生き残りたちでもなければ、「回教徒」の剥き出しの生、すなわちあらゆる証言から逃れ去る、残酷に燃やし尽くされたものの灰でもなく、第三のもの—証言不可能なものを証言することそれ自体である。アガンベンはこの文脈の中でこそ、残りのものについてのメシアニズム的な話を参照するように指示しているのであって、この話は選ばれた民族のうちであらかじめ数の限られた一部の者たちの救済に関わるものではない。しかしこのような文脈と全く同様にして、このタイトルがいう残りのものは、剥き出しの生の倫理に襲いかかる両義性の解消不可能性としても了解されるのである。

アガンベンが繰り返し用いている実験という概念の使用法もまた両義的だ。アウシュヴィッツはユダヤ人が「回教徒」に変容し、人間が非-人間に変容するという「これまで考えられたこともない実験」の場であり、そこでこの変容が「生と死」から離れつつ、人間性そのものを問いに付すのだとされている〔同前、67頁〕。この「実験」は主体的に遂行された実験としても、悪魔的な世界精神の進歩のうち的一段階としても把握することができない。人間的なものの力と無力とを見逃すまいと努力する倫理学者の眼には、歴史はこうした「実験」の連続として、極端で無気味な諸可能性の絶え間なき露呈として立ち現れてくるのである。しかしながら、アガンベンがこの実験の概念をことさら展開していないために、読者はマリア・ツィンフェルトによる独訳でメルフェ社から出版されている、この著者のもう一つのテキストに取り組みなければならない。『バートルビーあるいは偶然性』〔本論稿末尾の文献案内を参照〕は短いながらも凝縮された哲学論文で、何かが存在しないこと、あるいは何かをしないことができるという能力を論じており、「実存することの技法」に関わる「真理なき実験」の表象がこの論文の中心になる。実存の実験が問題となるのは、その実験の手筈がある根底的な「人間学的な突然変異」を結果するとされるからである。そしてこの実験が「真理なき」実験であるのは、この実験が立証や反証の役に立つのではなく、それまで知られることもなかった存在様式を初めて発見するのに役立つとされるからだ。すなわち「存在することができると同時に存在しないこともできる」という偶然的な存在である。しかしながら、収容所で人間が非-人間に変容するという途方もない事態の中には、いかなる能力も可能も力も見て取られはしない。したがってアウシュヴィッツの残りのものが

問題となる場合には、この実験の概念は両義的であるにとどまらざるをえないのではないだろうか？

「存在-可能と非-存在-可能」との、あるいは「生起と非-生起」との間に位置する存在を、アガンベンは偶然性についての論文『バートルビーあるいは偶然性』の中では想起として特徴づけている。彼は想起の中に「ポテンツ〔可能態、潜在的な力〕への高まり」を見て取っている。「想起はすでに起こったものを起こらなくてもよかつたものにし、存在しなかつたはずのものを起こりえたものにすることによって、過去に対して再び可能性を産み出すのである」。この文を剥き出しの生の倫理の光のもとで読むならば、アガンベンの思考は想起と証言の間の緊張の中を動いていると主張できるかもしれない。証言しえぬものの証言は想起を存在させることができ、再び可能性を産み出すことができるのだろうか、それともまさにその想起を通じて、起こったこと〔生起〕について——アウシュヴィッツについて、欺くことを余儀なくされているのだろうか？

#### 【文献案内】

Giorgio Agamben: *Quel che resta di Auschwitz. L'archivio e il testimone*. Bollati Boringhieri, Torino 1998. [邦訳、ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳、月曜社、2001年。]

Giorgio Agamben: *"Bartleby oder die Kontingenz" gefolgt von "Die absolute Immanenz", übersetzt von Maria Zinfert und Andreas Hiepko*. Merve Verlag, Berlin 1998. [ジョルジョ・アガンベン『バートルビーあるいは偶然性』(邦訳近刊、月曜社)。イタリア語で1993年に出版された『バートルビー——創造の定式』のうち、アガンベン執筆部分にあたる第二部のドイツ語訳。もともとの『バートルビー——創造の定式』は、ジル・ドゥルーズのバートルビー論を併載することでアガンベンとドゥルーズの共著という体裁になっている。この「共著」の第1部はドゥルーズによる論文「バートルビーあるいは形式」のイタリア語訳で、そのそもその初出はメルヴィルのフランス語訳に付せられた解説である。]

#### 【原註】

\* このテキストは1999年4月19日付『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥンク』紙(第90号)において発表された。〔訳者補足。このテキストは『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥンク』紙上では「書評(専門書)」欄に掲載されており、表題が「死と生の彼岸で」に変更されている。また編集者によるものと思われる段落改行が施され、いくつかの語句が変更されている。ここに訳出したのは、著者アレクサンダー・ガルシア・デュットマン本人から送っていただいた「私家版」原稿である。『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥンク』紙に掲載されたヴァージョン「死と生の彼岸で」は、インターネット上の同紙のサイトで読むことができる。サイトのURLは以下の通り。

<http://www.faz.net/IN/INtemplates/faznet/default.asp?tpl=book/content.asp&rub={9E7BDDEC-469E-11D4-AE7B-0008C7F31E1E>

【訳注】

[1] 「非人間的なもの (Unmenschliches)」と、ハイフンで区切られた「非 - 人間的なもの (Nicht-Menschliches)」との区別に注意。前者があくまで人間性の範囲内で理解可能な無情さや残酷さを示すために使われている言葉であるのに対して、後者は端的に人間でないもの、人間という枠組みをはみ出してしまったものを示すために使われる言葉である。非 - 人間の剥き出しの生は、人間性の限界を否応なしに際立たせてしまうがゆえに、人間なるものを問いに付す。アガンベンが注目する「回教徒」はもはや主体性を喪失した「非 - 人間」であり、したがって、人間として自らに固有の生を生き、固有の死を死ぬことがない。つまり「回教徒」は、ただ単に生きている。よく知られているように、アガンベンはこの「単なる生 (das bloß Leben)」の概念をヴァルター・ベンヤミンのテキストを読むことから出発し、生政治へのフーコーの洞察を経ることで「剥き出しの生」という概念へ練り上げている。

[2] 原著『ホモ・サケルー主権の権力と剥き出しの生』(邦訳は高桑和巳訳で、以文社から近刊予定)の出版は1995年、つまりこの書評が書かれた1999年の4年前のことである。原著『アウシュヴィッツの残りのもの』の出版は、この書評に先立つこと一年前の1998年である。

“ZWEIDEUTIGKEIT DER ETHIK: Giorgio Agamben über das, was von Auschwitz bleibt”

Original text in German © 2002 Alexander García Düttmann

First published in Frankfurter Allgemeine Zeitung, 19 April 1999, under the title: "Jenseits von Tod und Leben".

Japanese translation and notes © 2002 Kazuhiro Shimizu and Getsuyosha Limited

This Japanese translation is permitted by Alexander García Düttmann and published in Japan by arrangement with himself, limitedly for the publishers' sales promotion of his book.

著者略歴：1961年バルセロナ生まれのドイツ系哲学者。フランクフルト大学（ゲーテ大学）とパリ大学で哲学を修めた。89年、28歳の折に、パリの先端の学術出版社ガリレオから『贈与された言葉——記憶と約束』を公刊。以後、91年にフランクフルト・アム・マインの大手出版社ゾーアカンブより『思惟の記憶——ハイデガーとアドルノについての試論』（邦訳近刊、月曜社）、93年に同都市の出版社フィッシャーから『エイズとの不和——あるウィルスについて熟考され語られたこと』（邦訳近刊、関修＝訳、月曜社）、96年にクラウス・ベアから『この世のすべての発語と沈黙において、愛とは何か——ニーチェ・系譜学・偶然性』、97年にゾーアカンブから『諸文化のはざままで——承認をめぐる闘争のさなかの緊迫』、99年にトゥリア+カントから『友たちと敵たち——絶対的なもの』（邦訳『友愛と敵対——絶対的なものの政治学』大竹弘二・清水一浩＝共訳、2002年、月曜社）、2000年にゾーアカンブから『芸術の目的＝終焉——三つの美学的研究』を刊行。同書肆からは、デリダのドイツ語訳を立て続けに発表しており、88年には高名なハイデガー論『精神について』を、92年には『他の岬』と『法の力』の翻訳出版した。彼自身のデビュー作もまたデリダに奉げられている。アメリカ・スタンフォード大学、イギリス・エセックス大学、オーストラリア・モナシュ大学を経て、98年以降イギリス・ミドルセックス大学教授として在籍、ヨーロッパ現代哲学を教えている。近刊として、ゾーアカンブより『誇張の哲学』、ディアファネスより『痕跡を消す』、サーパンツ・テイルより『ライフラインと自画像——哲学的エッセイ集』を予定している。

## NEVER BEFORE, ALWAYS ALREADY アガンベンと関係の 카테고리 についてのノート

アレクサンダー・ガルシア・デュットマン (訳=宮崎裕助)

〈これまでに決して [never before] なかったもの〉へと我々が関係することはできないのと同様、我々は〈つねにすでに [always already] あるもの〉へと関係することもできない (1)。我々が〈これまでに決してなかったもの〉へと関係するや否や、我々は、あたかもそれが〈つねにすでにあるもの〉であるかのように、それを何か認識可能なものへと変形してしまう。また、我々が〈つねにすでにあるもの〉へと関係するや否や、我々は、あたかもそれが〈これまでになかったもの〉であるかのように、我々はそれを何か新しいものへと変形してしまう。それゆえ、何か〈これまでに決してなかったもの〉や〈つねにすでにあるもの〉について言うことは、そうしたものが言われぬものごとということ、そうしたものがあらゆる〈言う〉に先立つものごとということ、そして、その始まりが唐突であるにせよ際限なく反復されるにせよ、はじめからそうしたものは一つの残余を構成するということ、こうしたことを言うことに至るのである。と同時に、しかしながら、我々は、一つの残余にしか、つまり関係されぬままにとどまらねばならないものにしか、関係することはできない。というのも、もし〈我々が関係するもの〉が、関係されぬままにとどまらなかつたとすれば、我々はもはや〈我々が関係するもの〉に關係するのではなく、ある意味で、それに一致してしまうことになるからである。

ある一つの残余が、我々がそれに関係する際に関係されぬままにとどまる限りで、それは絶対的に唯一のものであり、かつ絶対的に分割されたものである、ということが分かる。一つの残余は、それ自身のうちで關係的である。なぜなら、我々が〈残余を構成するもの〉を捉えようとするその度ごとに、当の残余はそうでないものへと關係し続けるからであり、また、残余は關係を不可能にすることで、それは、自身を引き渡すと同時に自身のうちに留まりながら、我々がそれに関係するよう挑戦してくるからである。關係の 카테고리 のこの逆説的なロジックが、脱構築のロジックである。というのも、脱構築派が「反覆可能性」と呼ぶところのもの、つまり起源なき反復と、オリジナルなき変質＝他化との關係は、〈つねにすでにあるもの〉と〈これまでに決してなかったもの〉との間の決定不可能な關係、可能かつ不可能な關係という考えにまさしく対応するからである。そういうわけで、脱構築派が「非 - Xのみが、Xである、あるいはXを可能にする、あるいはXでありうる」といった命題——例えば、不可能なもののみが可能である、決定不可能なもののみが諸々の決定を可能にする、赦しえぬもののみが赦されうる、等々——の観点から思考しようとするということは、さして驚くべきことではない。

何ものかへ関係する際に、我々は、反覆可能性に関わるのであり、それが反復と変質＝他化とをもたらす。かくして、関係の不可能性としての残余は、それ自身の不可能性という不確実な根拠のうえでそれが可能にしている関係に対して、たんに先立つのではない。それはまた、この関係から結果するものでもあるのだ。

アウシュヴィッツを一つの残余として語ることは、〈これまでに決してない〉の唯一性をアウシュヴィッツに帰属させようとするだけでもなければ、アウシュヴィッツを〈つねにすでに〉の遍在性と同一視しようとするだけでもない。それはただ単に、アウシュヴィッツに関係しようとする、それが「言語を絶するもの」(2) になってしまわぬようにすること、そのことでいかなる同一化と帰属化をも超出しようとするにすぎない。あるいは、関係それ自身を同定しようとするあらゆる試みに内属する諸々の困難があるのであってみれば、それは、アウシュヴィッツに関係しないでおこうとは**しない**ことなのだ。アウシュヴィッツが関係に先立つことができない限りで、アウシュヴィッツはこの関係によって作り出され、もたらされるのである。証言は、アウシュヴィッツの後に来なければならないが、それはまたアウシュヴィッツの前に来るものでもある。おそらく、ホロコーストの否認は、ホロコーストに対するいかなる可能な**関係**にも書き込まれている。

一見したところ、ジョルジョ・アガンベンが『アウシュヴィッツの残りのもの』は、脱構築のロジックを裏書きするもののように思われる。第一章では、証言の可能性が、それ自身の不可能性、つまり言語に属さぬものや言語を持たぬ者へと関係づけられている。一方でアガンベンが主張するのは、言語が証言であるためには、それは意味の限界に触れなければならないということである。しかし、言語が「非 - 言語」に由来する限りで、つまり「文字列のたんなる決定不可能性」(邦訳、50 頁) に由来する限りで、言語はつねにすでに証言であって、この証言は、証言することにおいて、証言しない何ものか、それゆえ証言を必要とする何ものかへと関係するのである。他方でアガンベンが主張するのは、もし言語が実際に証言と見なされるべきであるとするならば、それが、証言する関係の構造を持ち、意味の限界に触れるだけでは充分でないということである。言語の無意味なノイズは、一つの「声」と混同されるべきではない。なぜならば、言語が証言できない理由と、一つの「声」が証言できない理由とは、「まったく別 [tutt'altre]」(3) だからである。言い換えれば、言語の構造におけるギャップは、言語を「非 - 言語」へと開くだけではなく、いっそう深いギャップ、いわば、言語を持たぬ者によって、つまり「回教徒 *Muselmann*」の**歴史的**形象ないし非形象によって記し付けられたギャップを、覆い隠しするのである。かくして、証言の〈つねにすでに〉は、証言が真に証言となるべきであるならば〈これまでに決してない〉を要請するように思われるだろう。この二重の不可能性、すなわち〈これまでに決してない〉に関係することなくしては〈つねにすでに〉へと関係することは不可能であり、また〈つねにすでに〉に関係することなくしては〈これまでに決してない〉へと関係することは不可能であるというこの二重の不可能性によってこそ、アガンベンは、自らの書物

を指して「証言に対する終わりのない註釈」(4) だと述べることができるのではないだろうか。アウシュヴィッツの残りのものとは、生き残った者が証言している「回教徒」のことでもなければ、証言をする生き残った者自身のことでもなく、証言としての言語のことでもない。それは〈つねにすでに〉と〈これまでに決してない〉から成るもの、にもかかわらず証言を求めている呼び声であるもの、そうしたものとしての証言のことなのである。

『ホモ・サケル』は、「主権的権力と剥き出しの生」についての分析であり、『アウシュヴィッツの残りのもの』に一つの政治的な存在論の背景をもたらしているのだが、そのなかでアガンベンは、関係のカテゴリーに焦点を合わせている。まさにこのコンテクストにおいて、アガンベンは、脱構築が、主権〔至高性〕の関係と、主権的關係が作り出す非常事態ないし例外状態とを永続化させていると批判する。アガンベンは、ショーレムからの表現を用いつつ、主権を *Geltung ohne Bedeutung* つまり「意味作用を欠いた実効力」(5) と定義している。そうした「意味作用を欠いた実効力」は、〈それが関係するもの〉を放棄しかつ排除することによって含み込むという**純粋な**関係である。脱構築はそのとき、主権を強化することになる、というのも脱構築は、存在を、一存在者が関係せねばならないがいまだ関係できずにいる決定不可能性との関係と解釈するからである(6)。しかし、一つの関係が〈それが関係するもの〉を関係されぬままにしておく限りで、主権的關係を産み出し再生産することのないような何らかの関係がそもそもありうるのかどうか、という問いが生じる。主権への根底的な批判は、まさしく関係のカテゴリーとその存在論的ないしは準 - 存在論的な正当化そのものに向けられなければならないのではないのか? ——というのも、この正当化は、脱構築において自らの究極の表現を得ているのだから。アガンベンがそのような批判の必然性を示唆しているのは、『ホモ・サケル』の始めの部分、すなわち「主権のロジック」についてのプログラムの章を締めくくの一節において、彼が「政治 - 社会的な事実 *factum*」は、もはや一つの「関係」という観点から考えられるべきではなく、また「存在者と存在そのものとの共存 [being together] は、関係的形式を持たない」(7) ということ断言するときである。しかし「共存」は、いかにして一つの関係でないことがありうるのか。また、何をもち証言は、非常事態から区別され、排除の包括的な関係——アガンベンによればこれは強制収容所の制度へと通じているものなのだが(8)——から区別されるのだろうか、両者いずれの場合にも、関係の同じカテゴリー、それゆえ、同じ「主権のロジック」がいまだ作動しているのであるならば? アガンベン自身、証言を「決定不可能な中間ないし媒質」(9) として記述しているのではなかったか? 〈残余〉ないしは〈残りのもの〉の概念についての議論は、アウシュヴィッツの書の最後の箇所に見出され、最新著『残された時間』 *Il tempo che resta* でも続行されているのだが、この議論は、我々にここでヒントをもたらすことができるだろうか。

アガンベンによって導入されている残余の概念は、一つの全体ないしは全体の特定の一部が、統一的で自同的なものとして、またそれ自身と一体となった一つのものとして自らを指定することができないという不可能性を指し示している。

残余とは、還元不可能な、それゆえ根源的な非一的存在〔being-not-one〕、単純な肯定によっても否定によっても表現されえぬ「全てでない」ないし「非全体」〔non tutto〕 (10) のことであり、総合的統一に終わるのではない二重否定の形式をとる。この意味において、残余を構成するものは関係的である、なぜならば、それは或る〈開け〉、すなわち、それを通して何ものかが、自身ではない何ものかへと関係するような〈開け〉、それゆえ何ものかが、自身でないものへと転化することなくしては自身であるところのものをやめてしまうような、そうした〈開け〉だからである。アガンベンにおける残余の概念は、関係の関係作用、関係が関係するという**こと**、その事実を指示するのである。ここで問題なのは、何ものかへと関係することではない。そうではなく、一つの**関係であること**、関係に入り込み、その事実性に触れること、つまりは、それが関係するという**こと**のその**こと**〔its that-it-relates〕に触れることが問題なのである。ただそのようなパースペクティヴからのみ、一つの残余は、もはや「関係的形式」を持つようには見えない一つの「共存在」として現れることができる。「主権のロジック」に関係せず、そこから袂を分かつためには、また、反覆可能性の悪無限、永続的で、つねに更新しつねに挫折する関係作用の悪無限に関係せず、そこから袂を分かつためには、人は、関係の関係作用において自己自身を維持しなければならないのである。結果、アウシュヴィッツを一つの残余として語ることは、ただたんに証言を通じてアウシュヴィッツへと関係しようとする**こと**ではない。それは、証言そのものになろうと**すること**、何ものかに対して——アウシュヴィッツに対して——証言することをやめようとする**こと**なのである。〔1〕

この点において、しかしながら、固有名が消失してしまうように思われる。というのも、ひとたび残余の概念が一つの関係と一つの「関係的形式」なき「共存在」との間の差異に洞察をもたらすや否や、アウシュヴィッツの残りのものについて語ることは、哲学的には無関心〔無差異、どうでもよいこと〕になってしまうからである。そうした無関心の証拠を挙げる必要があるとするならば、アガンベンが『残された時間』においても残余の概念を展開しているということ、その際、聖パウロの「ローマ人への手紙」についての一注釈というコンテクストにあって、アガンベンはアウシュヴィッツへのいかなる特有の参照もなしで済ませているということを描き出すだけで充分だろう。実際、『アウシュヴィッツの残りのもの』の最終章は、後の議論の展開を告知する、ほとんど一つの素描ないしは初稿以上のものではない。固有名への哲学的無関心が明るみにするのは、いかなる洞察も、それが哲学用語で表されていようがまいが、抽象化と理念化をもたらさねばならないということであり、この抽象化と理念化は、認識行為と固有名との間の**構成的**連関ないしは**関係**という考えとは両立不可能なのである。こうした理由から、「アウシュヴィッツ以後」の哲学ないし倫理という企図は、誤解を招くものであるか、さもなくば、ある洞察——例えば〈これまでに決してなかったもの〉に関係することの諸含意への洞察——が存在するためには、口実や機会が必要であるということをもたんに意味するにすぎない。**ある口実や機会への依存は偶発的ではないかもしれないが、口実や機会を一つの固有名と同一視することは、確かに偶発的である。**アウシュヴィ

ツの残りのものについてのいかなる議論も、ある概念要素や、抽象化と理念化の一要素のなかで移動している限り、この種の議論に賭けられている問題は、〈これまでに決してなかったもの〉を確立することよりもむしろ、〈つねにすでにあるもの〉を確立することなのである、たとえこの議論が〈これまでに決してない〉と〈つねにすでに〉へと関係することの弁証法に集中したとしてもだ。言い換えれば、アウシュヴィッツの残りのものについての議論は、概念が固有名の抹消を行なう、その諸々の仕方に関わるのである。哲学は、ある重要な意味において、アウシュヴィッツ以後には決して来ることがない、アウシュヴィッツ以後には、詩、もしくは文学のみがありうるのだ、そう結論したくなるかもしれない。しかしこの主張はなしえない、なぜなら、それはそれ自身を反駁するものとなるだろうから。

ダカーポ(私は関係できない)〔2〕

- しかし私は、何ものかを新しい何ものかへと変形することなくしては、それに関係しそれを反復することはできないのだろうか。
- もし私が、何ものかを新しい何ものかへと、つまりまったく再 - 認識されえぬような何ものかへと変形することなしに、それを反復するとすれば、私は何も反復してはいない。一つの反復は、何ものも変えられていないこと、その反復が生じる以前に創り出されていなかったようなものは何も創り出されないことを必要とする。と同時に、私が、もし当の反復と〈それが反復するもの〉とを区別できなかつたら、私は反復について語るができなくなってしまうだろう。実際、一つの反復以上に、つまり他者を触れぬままにしておかねばならないという一つの関係以上に、創造的で革命的なものはあるだろうか。反復と関係は、本性上捉えがたいものであり、特異性質的で暗示的な概念化を要求しているのである。一つの関係に内属する否認——まったく単純に自らの対象と一致するというような反復、確認、追認の不可能性から生じる否定——を認める者は、そうした否認を否認する者以上に、責任を負っていたり、無責任であったりするのだろうか。
- しかし、なぜ関係の可能性はまたその不可能性でもあるのか。
- なぜなら、一つの可能な関係——ある種の抵抗、還元不可能で決してたんに予備的なものではない抵抗を**経験**しない関係——は、それ自身を抹消するからである。それは、もしこの関係が不可能にすぎないと分かればそれ自身を抹消してしまうのと同様である。一つの可能な関係は、諸々の関係項や関係因の一致に至ってしまう。また、一つの不可能な関係は、これらの関係項や関係因を完全な分離状態におくような無関心に至ってしまう。今度はそのような一致と無関心とが一致することになる。脱構築においては、反覆可能性は、反復と変質＝他化との両方を指し示している。あるいはむしろ、変質＝他化としての反復、反復としての変質＝他化を指し示すのである。もし反覆の特定の審級や行為に際して、

変質＝他化の総量と反復の総量とを区別できるとするならば、変質＝他化は反復に従属してしまうことになろうし、反復はそれ自身を廃棄してしまうことになろう。反復はもはや変質＝他化を伴わなくなるだろう。ある意味で、反覆可能性が指し示しているのは、諸概念の〈つねにすでに〉と、諸々の名の〈これまでに決してない〉との間の緊張である。それは、概念と名とを横断しつつ分割する緊張、それらを諸関係にもたらず緊張なのである。

#### 【原註】

(1) このテキストは、2000年9月にプリンストン大で催されたジョルジョ・アガンベンとの討議のために書かれた。これは、その際の、ニューヨーク大学からの学生諸君に捧げられる。彼らなしにはこのテキストは書かれることがなかったであろう。私はまた『アンゲラーキ』の編集諸子にも感謝したい。

(2) Giorgio Agamben, *The Remnants of Auschwitz*, trans. Daniel Heller-Roazen (New York: Zone, 2000) 32. [邦訳、ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』上村忠男・廣石正和訳、月曜社、39頁]。この書物についてのより持続的な議論は、Alexander García Düttmann, “Zweideutigkeit der Ethik” [倫理の両義性]を参照。これは、*Frankfurter Allgemeine Zeitung* 1999年4月19日号紙上で、“Jenseits von Leben und Tod” [生と死の彼岸]というタイトルのもとで発表された。

(3) *The Remnants of Auschwitz* 39. [邦訳、50頁]

(4) *The Remnants of Auschwitz* 13. [邦訳、10頁]

(5) Giorgio Agamben, *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*, trans. Daniel Heller-Roazen (Stanford: Stanford UP, 1998) 51. [邦訳『ホモ・サケル—主権的権力と剥き出しの生』上村忠男監修、高桑和巳訳、以文社、2003年]

(6) *Homo Sacer* 54.

(7) *Homo Sacer* 60.

(8) *Homo Sacer* 168-69.

(9) *The Remnants of Auschwitz* 161. [邦訳、217頁]。アガンベンの思考と「中間」や「媒質」[*medio*]の概念との関連性については、Alexander García Düttmann, “Integral Actuality,” in Giorgio Agamben, *Idea of Prose*, trans. Michael Sullivan and Sam Whitsitt (Albany: State U of New York P, 1995) [アガンベン『散文の理念』への序文]を参照。

(10) Giorgio Agamben, *Il tempo che resta* (Torino: Bollati Boringhieri, 2000) 53. [邦訳『残された時間——「ローマ人の手紙」への註釈』大橋喜之訳、光芒社、近刊]

#### 【訳注】

[1] デュットマンからの私信によれば、彼はアガンベンの試みを、アドルノやベンヤミンにおいて「救済」(“**Rettung**”)と呼ばれていた諸概念において「もはや関係的ではなくなるような共存在」を考える企てとして見ているとのことである。その限りにおいて、これ

は「脱構築の悪無限」に対置されるという。こうした脱構築の性格に関する議論は、デュットマンの次のテキストを参照できる。Alexander García Düttmann, “Die Gewalt der Zerstörung” in *Gewalt und Gerechtigkeit: Derrida-Benjamin*, ed. Anselm Haverkamp (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1994), pp. 288-314 [translated by Michael Shae as “The Violence of Destruction,” in *Walter Benjamin: Theoretical Questions*, ed. David S. Ferris (Stanford: Stanford University Press, 1996), pp. 165-184]; “La déconstruction se démarque,” in *Le passage des frontières: Colloque de Cérisy 1992 autour du travail de Jacques Derrida* (Paris: Galilée, 1994), pp. 347-8.

[2] 以下の節は『アンゲラーキ』掲載にあたって新たに付け加えられた。「ダカーポ」とは音楽用語では、つねに終わりの後に来るものを指す。ここでは一種の仮想的な問答が再び試みられることでこのことが強調されている。例えば、関係概念を尖鋭に練り上げた結果「おそらく、ホロコーストの否認は、ホロコーストに対するいかなる可能な**関係**にも書き込まれている」と結論するデュットマンの議論を拒否したくなるかもしれぬ読者を想定して、「一つの関係に内属する否認——まったく単純に自らの対象と一致するというような反復、確認、追認の不可能性から生じる否定——を認める者は、そうした否認を否認する者以上に、責任を負っていたり、無責任であったりするのだろうか」と反問するといった具合である。実際、ここで言われる「責任」と「無責任」の区別はそれ自体としては根本的に決定不可能なままにとどまっている。この「責任」の含意に関して訳者が宛てた私信に答えて、デュットマンはこう補足してくれた。「あるテキストの一貫性を判断する際、そのコンテキストを見ることも同様に重要だと私は思っている。コンテキストとはつまり、ある一定の論点が出されている際のテキストにおける契機のことだ。以前に言われたことは後で言われたことにおいて修正されうだけではない。また、様々に異なるアプローチが一種の**コンステレーション** [布置関係]を形成しうだけではない。それだけでなく、さらなる留保なくしては、いくつかの問いが、裏付けられたテーゼを表現するためにではなく、可能な逆のことを言う議論を満たすように提起されるかもしれないのである」。

“Never Before, Always Already: Notes on Agamben and category of relation” in *ANGELAKI* vol.6-3, pp.3-6, December 2001, London, Routledge

Original text in English © 2001 Alexander García Düttmann

Japanese translation and notes © 2002 Yusuke Miyazaki and Getsuyosha Limited

This Japanese translation is permitted by Alexander García Düttmann and published in Japan by arrangement with himself, limitedly for the publishers' sales promotion of his book.

ガルシア・デュットマン著作リスト：<http://biblia.infoseek.ne.jp/b/duettmann.htm>